

# 正法眼蔵のサ変動詞——分析その二——

田 島 毓 堂

はじめに

前稿「正法眼蔵のサ変動詞——その分析——」（『愛知学院大学禅研究所紀要三十八号』二〇一〇）において、正法眼蔵の漢語サ変動詞全体の数量的分析を行い、その自動詞・他動詞に関しても若干の言及をした。今回、和漢複合のサ変動詞について補足した上で、その語構成の面を中心に、正法眼蔵のサ変動詞がいかなる性質のものかを考えた。い。

一

まず、和漢複合のサ変動詞について、その用例と共に補

正法眼蔵のサ変動詞——分析その二——（田島）

足する。

一・一 和漢複合サ変動詞の用例

全て、「あひ」という接頭語が漢語サ変に付けられたものである。

アヒ接ス一例 アヒ拝ス一例 アヒ罽礙ス7例 アヒ  
嗣法ス一例 アヒ是非ス一例 アヒ誹謗ス一例 アヒ  
面授ス一例 アヒ禮拜ス一例 アヒ称揚讚歎ス一例  
の九語一五回の使用である。意味としては、何れも「互いに……する」である。

(1) アヒ接ス(1例・自) 体1(連体)

○現成ノトキ現現アヒ接スルコトナク現成スヘシ(画餅  
五19オ5 中147-5)

「互いに接する」意、「接ス」は単独では13例、同率25位である。

(2) アヒ拝ス(1例・他) 用1(テ)

○郷間ノトモカラアルイハ照堂アルイハ廊下ノ便宜ノト  
コロニシテ幾十人モアヒ拝シテ同安居ノ理致ヲ賀ス(安  
居 十五18ウ7 下91-8)

「お互いに拝する」の意である。「拝ス」は単独では、31例有り、1字漢字サ変では10番目に多い。

(3) アヒ罣礙ス(7例・他ヲ) 未5(ズ) 体2(ガ1

ニ一)

○生也全機現ノ道理ハシメオハリニカ、ハレス、尽大地  
尽虚空ナリトイヘトモ、生也全機現ヲアヒ罣礙セサルノ  
ミニアラス、死也全機現ヲモ罣礙セサルナリ(全機 五  
13オ7 中156-11)

○コノ果スナハチ相性体力ヲアヒ罣礙スルカユヘニ諸法  
ノ相性体力等イク無量無邊モ實相ナリ(諸法 九16ウ3  
中234-11)

「互いに相手を妨げる」の意である。「罣礙ス」も多数  
(46例) 使用されており、二字漢語サ変では11番目に多  
い。格助詞はヲまたはニである。

(4) アヒ嗣法ス(1例・他) 用1(テ)

○袈裟ノ功德ハ正伝マサシク相承セリ、本様マノアタリ  
ツタハレリ、受持アヒ嗣法シテイマニタエス(伝衣 七  
20ウ10 上205-4)

「受持アヒ嗣法シ」は、岩波文庫本(永平寺版)では、  
「受持しあひ嗣法し」となっている。この方が自然であ  
る。「嗣法ス」も単独で44回使われており、数の上で13番  
目に多い。

(5) アヒ是非ス(1例・他) 体1(連体)

○オホヨソ一代ノ説教ニスヘテミエサルトコロハ諸佛ノ  
アヒ是非スル佛語ナリ(十方 十一30ウ8 中338-3)

「お互いにああだこうだと批判し合う」の意、単独の「是非ス」も1例有る。

(6) アヒ誹謗ス(1例・他) 用1(テ)

○コノユヘ二十方ノ唯仏与仏アヒ称揚讚歎スルナリ、サラニアヒ誹謗シテソノ長短好悪ヲトクヲ法輪トシ説法トセス(十方 十一30ウ2 中337-12)

「互いに誹謗し合う」意である。「誹謗ス」は単独で1例有る。

(7) アヒ面授ス(1例・他) 未(ズ)

○一祖一師一弟トシテモアヒ面授セサルハ佛々祖々ニアラス(面授 十一3ウ1 中312-12)

永平寺版は「一弟子」となっている。面授は師が弟子に法を一对一で、面と面とが相対して授けることを言う。面授は既にその中に「互いに」の意を含んでいる。「面授ス」単独で22例有り、二字漢語サ変中で同率29位である。

(8) アヒ禮拜ス(1例・他) 体1(ナリ)

○シカウシテノチ衆僧オノ、コ、ニシタカヒテ人事ス、人事トハアイ禮拜スルナリ(安居 十五18ウ6 下91-6)

「コ、ニ」は「コ、ロニ」の「ロ」脱字である。この異同「道元禪師全集」には示されていない。「互いに礼拝する」の意である。「礼拝ス」は単独では48例、2字サ変の第10番目に多い語である。

(9) アヒ称揚讚歎ス(1例・他) 体1(ナリ)

用例は(6)の中に有るとおりである。なお、「称揚讚歎ス」の単独用法はない。

以上、和漢複合サ変動詞の、「和」の部分は全て「アヒ」であった。そして、「アヒ称揚讚歎ス」以外は、全て、「アヒ」のつかない形の漢語サ変動詞も使われていた。

## 二 漢語サ変動詞の性質

正法眼蔵の漢語サ変動詞を構成する語幹部分ほどんな性質か、ということについて、考察する。即ち、普通に、サ

変動詞として用いてなんの違和感も感じないものばかりならば、こんな事を事新しく考察することは無かろうが、必ずしもそうではない。サ変動詞化する語については、現代語に於いても種々様々である。一時流行った「お茶する」「タバコする」などというのも、普通にはなかなか通用しにくいものだが、それでも分かる。「する」が、代動詞として機能しており、「タバコ」に対してなら、「吸う」の代わりの役目を果たしているのである。こういうその中に動作性を含まない名詞でなく、語幹に動詞性のある言葉ならば、それを動詞化する一種の機能語(この場合は、接尾辞と言うべきかと思う)として働く。サ変動詞は、代動詞として働いたり、語幹名詞、或いは、副詞を動詞化する機能語として働いたり、文字通りサ変動詞として語幹を目的語として吸収し、一語化して、一動詞として機能する場合など、種々である。本稿では、語幹の性質に焦点を当てて考えていく。そのことを、語幹の漢字の字数毎に考えていく。

## 二・一 漢字一字サ変の語幹の性質

漢語サ変動詞を構成している漢字の部分を見ると、勿論多くは、普通にサ変動詞としてなんの違和感もない。しかし、通常サ変動詞化して用いることはないようなもの、あるいは、通常は漢語サ変とせず和語の動詞として用いるのが普通なものが見られる。既に、一々の用例については、それを掲出し、若干注意すべきことに言及してきたので、繰り返すことはしない。一字漢字サ変動詞の語幹は、①普通にサ変動詞とされるもの、②サ変動詞とするには違和感のあるものに分けて考えられる。

そして、②の中に幾つかの類型のあることを指摘しておこうと思う。

①に属するのは、次のようなものである(括弧内は用例数とその自他、受ける格助詞)。

痾(2・自) 愛(19・他ヲ) 安(8・他ヲ)  
 位(1・自) 違(6・自5 他1ヲ) 揖(11・自)  
 印(1・他ト) など、計211語 1510例。

表1に全てを掲載した。

表1 一字漢字サ変 動詞性漢字

痾(2・自) 愛(19・他ヲ) 安(8・他ヲ) 位(1・自)  
 違(6・自5 他1) 揖(11・自) 印(1・他ト) 会  
 (15・他ヲト) 壞(2・自) 易(1・他ヲ) 掩(3・他ヲ)  
 縁(2・他ヲニ) 応(1・自) 加(1・他ニ) 呵(2・他  
 ヲ) 臥(3・自) 賀(1・他ヲ) 画(33・他ヲ) 開(4・  
 他ヲ) 劃(1・他ヲ) 学(129・他ヲト) 合(2・他ヲ) 換  
 (1・他) 灌(1・他ヲ) 感(5・他ヲ) 觀(5・他ヲ)  
 願(1・他ヲ) 記(7・他ヲ) 帰(7・自) 起(1・自)  
 擬(39・他ヲニト) 掬(2・他ヲ) 喫(6・他ヲ) 休  
 (5・自) 究(1・他) 狂(1・自) 行(13・他ヲ) 吟  
 (1・他) 具(8・他ヲ) 救(1・他ヲ) 供(2・他ヲ)  
 烘(1・他) 薰(3・他) 群(3・自) 化(24・自12 他  
 ヲ12) 礙(7・他ヲ) 計(2・他ヲ) 決(2・他ヲ) 検  
 (1・他ヲ) 驗(2・他ヲ) 現(13・自9 他4) 居(6・  
 自) 拳(63・他ヲ) 期(8・他ヲ) 幸(2・自) 向(1・  
 自) 抗(1・他ヲ) 孝(1・自) 構(1・他ヲ) 講(5・  
 他ヲ) 号(2・他ヲ) 告(1・他) 混(2・他) 作(1・  
 他ヲ) 鎖(1・他ヲ) 坐(20・自) 散(2・他ヲ) 参  
 (35・自22 他13ヲト) 死(4・自) 嗣(9・他ニヲ) 資  
 (1・他ヲ) 辞(6・自1ヲ 他5ヲ) 侍(1・自ニ) 持  
 (6・他ヲ) 食(6・他ヲ) 叱(18・他ヲ) 失(4・他ヲ)

又(1・他ヲ) 捨(1・他ヲ) 瀉(1・他ヲ) 謝(3・他  
 ヲ) 着(18・他ヲ) 修(10・他ヲ) 誦(3・他ヲ) 執  
 (2・他ヲ) 充(11・他ヲ) 住(20・自ニ) 宿(4・自ニ)  
 準(6・自ニ) 順(1・自ニ) 書(1・他ヲ) 署(5・他  
 ニ) 処(4・自ニ) 召(2・他ヲ) 請(25・他ヲト) 證  
 (32・他ヲト) 称(128・他ヲト) 掌(2・他ヲ) 生(19・自  
 13 他ヲ6) 成(7・他ヲ) 乘(2・自) 信(11・他ヲ)  
 凶(15・他ヲ) 塗(1・他ヲ) 推(1・他) 制(1・他)  
 製(1・他) 接(13・他ヲ「アヒ接ス」) 撰(4・他ヲ)  
 選(3・他ヲ) 宗(1・他ヲ) 奏(1・他) 喪(2・他ヲ)  
 装(1・他ヲ) 澡(2・他ヲ) 捻(1・自) 增(2・自)  
 触(6・自5 他ヲ1) 続(2・他ヲ) 属(7・自) 卒  
 (1・他) 存(4・自他ヲ3) 損(1・他ヲ) 墮(3・自)  
 退(4・自3 他ヲ1) 帶(8・他ヲ) 体(1・他ヲ) 对  
 (5・自) 題(1・他ヲ) 卓(1・他ヲ) 搭(5・他ヲ)  
 達(11・自9 他ヲ2) 脱(5・他ヲ) 談(4・他ヲ) 团  
 (1・他ヲ) 断(1・自) 知(2・他) 治(4・他ヲ) 朝  
 (1・自) 貼(7・他ヲ) 長(6・自) 徵(1・他) 勅  
 (1・自) 通(20・自5 他15ヲ) 呈(10・他ヲ) 提(3・  
 他ヲ) 展(1・他) 転(27・自2 他25ヲ) 点(10・他ヲ)  
 逗(1・自) 投(6・自5 他1ヲ) 答(2・自ト) 同  
 (10自7 他3ヲト) 道(4・自3 他ヲト) 動(8・自7  
 他1ヲ) 得(8・他ヲ) 燒(1・他) 認(34・他ヲト) 拈

(45・他ヲ) 破(6・自1 他5ヲ) 背(12・他ヲ) 麁  
 (12・自6 他6ヲ) 拜(31・他ヲ9〔アヒ拜ス1〕) 拍(1・  
 他ヲ) 縛(1・他ヲ) 発(5・自4 他1ヲ) 罰(1・他  
 ヲ) 判(1・他ヲ) 比(8・自1 他7ヲ) 警(4・他ヲ)  
 白(3・自) 俵(9・他ヲ) 赴(1・自) 伏(1・自) 服  
 (3・他ヲ) 覆(1・他ヲ) 分(1・他) 変(5・自4 他  
 1ヲ) 遍(2・自) 弁(1・他ヲ) 補(5・自2 他3ヲ)  
 奉(1・他ヲ) 報(4・他ヲ) 亡(1・自) 忘(1・他)  
 謗(5・他ヲ) 磨(14・他ヲ) 抹(2・他ヲ) 瞞(2・他)  
 命(1・他) 銘(8・他ヲ) 滅(11・自) 問(4・他) 有  
 (1・他) 融(1・自) 要(4・他ヲ) 礼(4・他ヲ) 覽  
 (1・他ヲ) 乱(1・他ヲ) 理(3・他ヲ) 立(16・自3  
 他13ヲ) 略(2・他) 令(1・他) 量(7・他ヲ) 領  
 (2・他ヲ) 列(1・他) 弄(3・他) 録(1・他) 論  
 (22・他ヲ) 和(1・他ヲ)

(計) 211語 1510例

①以外の用例。

庵(1例・自) 名詞

何(1例・他ヲ) 引用

貴(2例・他ヲ) 〽トスル

儀(1例・他ヲ) 〽トスル

經(2例・他) 名詞

箴(1例・他) 名詞

是(1例・他ヲ) 引用 〽トスル

賤(2例・他ヲ) 〽トスル

の8語11回である。

①としてあげたものの中には、極く通常的に用いられるものと、そうでないものに別れる。そうでないものと考えられるのは、一つには、余り見慣れないもの、普通ならば和語動詞として表現して、わざわざ漢語サ変を作るまでもないものである。「作ス」「召ス」などのようなものである。特に、「召ス」などは「めす」を漢字表記しただけではないかと思われかねない。しかし、一部の名詞を除いては、和語は必ず仮名表記、漢字表記は漢語という原則が守られている正法眼蔵では、「召ス」はやはり漢語サ変動詞である(↓拙稿「正法眼蔵の表記法——道元・懐奘筆本における——」(『東海学園国語国文二号』一九七二) 拙著『正法眼蔵の国語学的研究』第三章第四節 参照)。通常、和語動詞が使われるであろうと思われるものを、前記の一覧表の(表1)中で、太字で示してある。勿論、正法眼蔵

においては一字漢語サ変として用いられているのであるから、これは、無用の詮索かも知れないが、上記の表を見られる方々も疑問を感じられるかも知れない、その、疑問を共有するものである。

また、②に入れなかったが、縁(二・他ヲ二)、宗(一・他ヲ)も、普通なら②に挙げた「トスル」とおなじように、「……ヲ縁トスル」「……ヲ宗トスル」の類例とすべきかも知れない。②には引用に関わる例と、普通ならば動詞にするとは考えられないような名詞がサ変化しているものを挙げた。

何ス・是スというのは、「仏性」の巻における、四祖と五祖の問答の中の「汝何姓」「是何姓」に起因して用いられているものである。二字漢字サ変の中にもこういう例が幾つかある。

庵ス・経ス・箴スは「庵として住む」「経を書く」「箴としてある」というような意味である。特に「経ス」などは単独で見れば、「経る、経つ」という意味にも解されるかも知れないので、注意しなければならぬ(ここには、その用例は掲げない↓拙稿「正法眼蔵のサ変動詞——その用

正法眼蔵のサ変動詞——分析その二——(田島)

例——(三二)『東海学園女子短期大学紀要一〇』一九七五)。

以上、一字漢字の漢語サ変動詞は、若干の違和感を持たせるものがあるが、その漢字の持つ性格によるものと、元来が、引用漢文にあったものをそのまま用いたことに起因するものだった。

## 二・二 漢字二字サ変動詞の語幹の性質

漢語サ変動詞のほぼ六五%の語数をしめる漢字二字のサ変動詞(一三一〇語四九八九回)には、一字の場合とほぼ同じ問題がある。その他に、漢字二字を連ねることに依る漢語造語法によって出来る語も僅かだが見られる。三字以上の語幹のように多彩な問題はない。その構造を分類してみよう。

### ① 引用漢文による語 12語14例

戲而<sup>1</sup> 以表<sup>2</sup> 故説<sup>1</sup> 便掌<sup>1</sup> 形如<sup>1</sup> 悉有<sup>1</sup>  
泥水<sup>2</sup> 如是<sup>1</sup> 汝得<sup>1</sup> 撫而<sup>1</sup> 仏体<sup>1</sup> 我会<sup>1</sup>  
これらは、何れもある引用漢文の中の文字を取り出して、サ変化したものである。引用漢文を示せないが、漢文語序

によるサ変動詞もある。

② 漢文語序による語 8語10回

遺有1 当観1 若会1 若至1 唯達2 例諸1

然之1 欲識2

以上の二種類は、文脈がなければ、あるいは、それが用いられている文脈を知らなければ、なかなか理解しにくいものもあり、正法眼蔵のサ変動詞の一つの特色を示すものと言える。数としては大したことはない。しかし、特色のある語群である。それらの一々の文字の品詞的性格については、問わなかった。というより、それを問うても仕方がないと思う。

次に、以上のような特殊なあり方を示すもの以外のサ変動詞語幹をその文法的な機能から分類してみよう。以下、語幹を構成する一字一字の漢字が、その場合どのような品詞性を持つかを中心と考えていくが、「品詞」という概念自体は、語が文の中で持つ機能に依って決定されるものである。しかし、それに準じて、その語の中の語構成を考える際に如何なる品詞性を持っているかによって考えていくというのである。実際には、同じ文字であっても、場

合によって違う品詞性を与えることもある。例えば「不言」の「言」は動詞として扱うし、「無言」の「言」は名詞とするといったようなものである。実際に当たると、必ずしも適切に判断できるとは限らないことをお断りしなければならぬ。

③ 動詞+動詞

上字、下字とも動詞性の文字の場合、熟字としても動詞性を持ち、サ変動詞語幹として、見慣れないということはある。特別な違和感を抱かせることはない。この類が当然のことながら最も多い。この中にも、共にそれぞれ動詞としての機能を持ちながら熟字化しているものと、一方が接辞化しているものがある。接辞が前接する場合と、後接する場合がある。

③-1 上下とも動詞として働く 694語2882例(一語平均四・一五回) 一部を掲げておく。

行益1 愛惜5 諳誦2 安置2 安排4 行李・行履5 違越1 倚解1 違背1

など。表2に全例を掲げる。





馳聘 3	鑄成 1	超越 20	聽許 9	聽取 14	聽受 1	跳出 11	踴跳 3	發得 1	保任 50	稟受 12	翻訳 1	買得 1	壳買 2
歎慕 1	担来 2	知及 4	值遇 1	築着 1	知見 8	馳走 2	拋捨 4	放捨 2	報謝 9	卜度 2	撲落 2	保護 2	保持 1
搭着 1	脱落 26	打破 5	墮落 1	談笑 1	斷絶 8	斷統 1	編集 2	辨備 1	包含 5	忘記 1	拋却 3	放下 3	望見 3
度量 5	打坐 4	墮在 2	打失 7	墮生 1	打殺 1	奪却 1	辟見 1	擊破 1	辨會 1	辨究 1	辨肯 18	偏參 12	辨取 5
諦觀 2	帶持 1	代說 1	代知 1	退転 1	滯累 2	打開 1	附囑 13	布遍 1	分布 1	分奉 1	分別 3	並化 1	併淨 2
塞却 1	損壞 1	蹲居 1	存取 2	尊重 6	尊崇 1	存没 1	覆藏 4	服用 1	符合 2	奉觀 9	奉獻 2	附授 1	布施 1
走入 1	澡浴 12	想料 1	草料 1	触折 1	塞破 1	触礼 1	披看 1	誹謗 1	比望 1	飛去 5	比論 2	怖畏 1	奉行 2
喪失 1	崇重 3	掃除 1	澡雪 1	草創 4	奏對 1	增長 2	撥無 1	比擬 1	飛行 1	破廢 2	比準 4	披尋 1	逼塞 1
洗浴 1	瞻礼 3	想憶 1	想契 1	崇敬 1	造作 6	掃灑 5	排立 1	發明 5	把拈 2	飛去 5	把来 1	破裂 1	披閱 3
撰集 1	洗淨 7	宣說 3	剪斷 1	染汚 16	訕勝 1	宣問 2	拈拈 1	排列 5	怕却 1	把住 1	把定 4	撥開 1	撥開 1
說尽 1	截斷 3	說透 2	說得 2	遷移 1	洗浣 2	穿貫 1	認得 1	拈拈 1	拈拈 1	念誦 1	拈出 3	拈得 2	拈放 2
省悟 1	整理 1	施設 2	責呵 1	設化 1	說似 1	說着 6	度脫 2	得着 1	讀誦 1	得知 1	得到 1	得活 1	得記 3
醉狂 1	推出 1	隨順 1	推度 1	睡眠 1	誓願 1	制禁 1	得悟 1	度与 1	貪愛 1	吞却 6	得到 1	得道 17	度取 2
信着 1	信受 11	臻萃 1	進退 1	進步 1	吹起 1	隨喜 4	道来 2	統領 1	答話 2	吐却 6	得開 1	答来 2	得取 2
思量 16	辭勞 1	浸却 2	信解 11	尋見 1	信仰 1	親近 3	登入 1	撞入 5	答拜 6	踏翻 2	登用 3	答来 2	得取 2
濁乱 1	覩見 19	書嗣 2	書伝 1	覩破 2	助發 3	侍立 1	道示 1	道出 1	道尽 1	逃逝 2	透脱 16	討得 1	得取 2
将来 4	省略 1	成立 3	商量 5	涉獵 1	照臨 3	勝劣 2	伝与 1	点来 1	伝来 5	同異 1	透過 3	道究 1	得取 2
請入 1	證入 4	照破 1	成滿 1	證明 7	生滅 4	請問 1	伝授 4	伝受 2	伝説 1	展転 1	纏遠 1	伝付 5	得取 2
消尽 1	憔悴 1	照穿 1	生長 7	證伝 2	承当 4	請得 1	通利 3	剷除 1	点檢 1	展転 1	纏遠 1	伝付 5	得取 2
承嗣 4	照悉 1	成就 6	成熟 1	請出 1	生成 1	昇晋 1	鎮通 1	沈溺 2	沈淪 1	墜墮 1	痛楚 1	通達 14	得取 2
照顧 4	昇降 3	拯濟 1	請參 1	稱讚 1	上參 2	證嗣 1	跳入 5	調人 1	聽来 1	鎮墮 1	鎮護 1	鎮作 1	得取 2
照鑒 1	賞翫 1	證究 4	生下 1	障礙 2	称計 2	生現 1	超出 2	超證 2	朝宗 2	頂戴 5	跳脱 4	跳跳 1	得取 2
受用 2	入来 1	修理 2	修練 1	使用 12	鎖殞 1	證契 12	超出 2	超證 2	朝宗 2	頂戴 5	跳脱 4	跳跳 1	得取 2

埋没 2 買弄 1 摩沐 1 満足 2 迷醉 1 滅度 2 滅没 2  
 沐浴 3 模搽 8 模得 2 聞及 1 聞教 3 聞持 1 問訊 9  
 問説 1 問来 2 趨出 1 誘引 1 游泳 1 猶滯 1  
 遊化 1 遊戯 1 養育 1 擁護 1 用着 3 与授 1 与奪 1  
 来現 4 来参 2 礼謝 1 礼證 1 来到 2 礼拝 48 羅列 1  
 爛壞 1 濫穢 1 理会 2 力究 1 離却 1 利潤 1 利益 1  
 略拳 1 了知 1 了別 1 領覽 2 料理 2 輪転 1 輪廻 1  
 流散 1 流往 1 流通 10 流転 1 流伝 1 流布 7 跨躰 3  
 零落 3 裂破 4 恋慕 2 鍊磨 2 漏泄 5 撈擄 1 惑乱 5  
 和合 3 剋来 1  
 計 2854

一番多い。その中に、一語、疑問のある語がある。「草料 1」である。用例を掲載した中で説明したが、この語そのものは、まぐさを意味する名詞である。しかし、この文脈から考えて、「想料」とほぼ同意の語としてここに含めた。

- ③-2 上字が接辞化している 四語四例  
 打着 1 打綻 1 打併 1 打眠 1  
 ③-3 下字が接辞化している 43語516例 (一語平均 一一・〇〇回) 一部を掲げる。

正法眼蔵のサ変動詞——分析その二——(田島)

学得 4 覚了 3 換却 8 管得 1 感得 2 疑著 37  
 擬著 1 喫著 1 究取 1  
 など。表 3 に全例を掲げる。

表 3 動詞 + 接辞

道取 220 問取 56 疑著 37 問着 28 道著 26 会取 24 聞著 15  
 動著 12 聞取 12 見取 11 換却 8 行取 8 參取 7 説取 5  
 学得 4 滅却 4 覚了 3 接取 3 厭却 2 感得 2 暁了 2  
 決了 2 證著 2 證取 2 崩御 2 摸著 2 蓋却 1 学取 1  
 管得 1 擬著 1 喫著 1 究取 1 拳頭 1 言取 1 刻却 1  
 穿却 1 染却 1 宗取 1 知取 1 道看 1 撞著 1 答取 1  
 牧得 1  
 計 43 語 516 回

いずれも、漢語サ変動詞として最も普通の語である。この③だけで、七四一語三四〇二例に達し、二字漢語サ変の五六・四%、延べで六八・一%になる。一語平均、四・五九回の使用である。

- ④ 動詞 + 名詞 254語618例 (異語率一九・四% 延語率 一一・四%)  
 動詞 + 目的語の関係になる構造の語である。漢語サ変動

詞の語幹としては普通のものである。中には、文脈によつて造語したものや、成句になつてゐるものも見られる。一部を掲げる。

下語 3 下種 2 行脚 1 為庵 1 印空 1 印水 1  
 印泥 1 曳人 1 回光 1  
 など。表 4 に全例を掲げる。

表 4 動詞十名詞

下語 3	下種 2	行脚 1	為庵 1	印空 1	印水 1	印泥 1
曳人 1	回光 1	依準 1	依摸 2	掩口 1	掩耳 1	援筆 1
開襟 1	開花 2	開眼 2	開悟 1	懷胎 1	回頭 1	開門 1
学道 17	格量 1	掛錫 6	画図 4	合掌 11	刮舌 2	加被 1
下簾 1	換鞋 1	看經 7	還源 1	陷虎 1	看病 1	棄恩 1
起首 1	棄身 1	喫拳 1	起塔 1	帰仏 1	起法 1	競頭 2
行道 1	曲躬 2	局量 3	供仏 2	繼位 1	計功 1	稽首 1
化儀 1	逆耳 1	下地 2	結果 1	結夏 1	結縛 2	化天 2
化道 1	化人 1	現身 1	還俗 1	見仏 11	原夢 1	見面 1
降儀 1	講經 1	交肩 2	叩頭 1	耕道 1	講法 1	降魔 1
悟道 8	混迹 1	栽樹 1	栽松 1	在裏 1	作鏡 2	作仏 22
坐仏 3	参内 1	識此 5	拭面 2	持經 1	至今 1	示衆 5
止宿 1	使籌 1	失色 1	失録 1	祠天 1	示人 1	嗣法 44

着手 2	叉手 6	捨衆 1	写勝 1	捨命 1	住位 3	從縁 1
充職 1	住世 2	授記 25	修己 1	頌古 1	樹功 2	受業 1
誦呪 1	出氣 2	出家 11	出山 1	出手 1	出城 1	出世 6
出胎 2	出頭 1	出嶺 1	修道 1	準的 2	巡堂 2	瞬目 1
巡察 3	證果 4	請暇 1	証拠 1	燒香 5	成祖 1	衝天 2
上天 1	上堂 7	成道 12	生兒 1	證仏 1	成仏 8	刺法 1
照面 1	請益 5	陞座 1	尽力 3	醉酒 1	隨衆 1	塗香 1
凶仏 1	齊肩 4	施財 1	質疑 1	殺仏 2	說法 10	節量 1
洗手 1	洗足 1	洗頭 1	洗面 10	造塔 1	造經 1	漱口 3
藏山 1	送食 2	藏身 7	掃地 1	造塔 1	造仏 3	即位 3
側耳 1	戴角 1	待悟 1	對面 3	打牛 3	打人 1	彈指 1
斷臂 1	斷惑 2	知音 1	釣佗 1	聽法 2	通語 1	低頭 1
剃頭 2	軛經 2	軛語 1	軛身 1	軛法 3	伝法 2	同衣 1
投機 1	答自 1	投誠 1	答他 1	到寮 1	得髓 1	得分 1
得法 4	得益 1	得力 1	杜口 1	入山 1	入室 6	入草 1
入堂 5	入門 1	忍辱 1	拈花 3	拈古 1	背眼 1	陪錢 1
破顔 3	破夏 1	破雪 1	拈花 3	拈古 1	比量 2	覆体 2
赴齋 1	奉事 1	赴堂 1	披群 1	披毛 1	徧野 1	報恩 1
放行 4	慕古 7	放光 1	逢仏 2	辨道 10	弘袖 2	癡心 16
發智 1	磨磚 2	鳴条 1	迷路 1	問自 1	聞声 4	問他 1
問法 4	聞法 5	有頌 1	遊山 1	遊方 2	遊方 2	揚声 1
揚眉 1	礼仏 3	落地 4	落髮 1	乱道 1	離俗 1	立志 1
立称 2	立地 2	流血 1	励力 1	弄他 1	籠籬 1	倚杖 1



一匝 1	一沐 1	一黙 1	一列 1	雲遊 2	雲立 2	晏駕 1
円成 2	円満 2	遠聞 1	遠慮 1	恩賜 1	寛繫 1	管見 1
雁列 1	危亡 2	久居 1	共語 3	寓止 1	共出 2	俱出 2
共住 2	口稱 1	俱動 1	炯誠 1	現住 1	強為 8	互換 2
兀坐 3	五佞 1	懇請 2	才生 2	再送 1	雜碎 1	三下 1
三察 1	三拜 2	自愛 1	自学 1	直指 3	直入 1	直拈 1
自号 1	自借 1	自称 21	自證 1	自專 1	自草 1	自代 4
自知 1	試道 1	自売 1	自買 1	試問 2	邪計 4	邪執 2
且道 3	且問 2	自惟 2	十成 2	十倍 1	倏見 1	將謂 1
正觀 1	相見 52	正嗣 1	正受 2	精進 1	誠說 1	正伝 162
正入 1	正脈 1	正聞 1	自落 1	自立 8	深愛 1	親見 1
神悟 1	深肯 1	深談 3	尽知 2	深入 1	新立 1	切忌 1
川湊 1	全跳 1	先赴 1	相違 1	相応 1	相觀 1	相礙 2
相繼 2	曾見 1	相嗣 19	相資 1	相似 11	相授 1	相修 1
相接 1	相證 2	相承 5	相對 5	相待 8	相談 1	相伝 7
相符 1	相逢 13	相瞞 1	相聞 1	相論 1	即解 1	即得 1
疎動 1	大悦 3	大疑 1	体究 4	体解 1	大悟 31	大笑 1
体達 12	体得 7	他遊 1	端坐 1	单伝 23	中興 1	等字 1
同語 1	同坐 5	同參 25	同死 2	同生 10	東來 1	独居 1
独処 1	独露 1	能信 1	能知 1	博覧 1	普勸 1	復生 1
普説 6	本行 1	本現 1	本来 1	万期 1	密受 2	密誦 1
冥感 1	弥淪 2	夢見 1	妄計 2	妄見 1	猛省 1	妄想 1
默誦 1	夜流 1	幽棲 1	乱会 1	乱想 1	乱辨 1	乱縷 1

計 177 語  
690 回

⑦ 否定辞 + 動詞 8 語 18 例 (一語平均二・二五回)

不会 7 不肯 3 不言 1 不惜 1 不讓 1 不知 3  
不道 1 無言 1

これらも、例えば、「会せず」というのではなく、「不会す」という形で用いられる。「無言す」も、他に類例がないので、仮に、ここに入れておいたが、「言」はここでは動詞ではなく、名詞である。

⑧ 介詞 + 動詞 5 語 19 例 (一語平均三・八〇回)

次に挙げる 5 語である。介詞は全て「為」である。この「為」は動詞ではなく、去声為字であり、これらは「…ノタメニ〜スル」の意になる。

為示 2 為説 6 為道 9 為問 1 為与 1

⑨ 形容詞 8 語 8 例

漢語形容詞が、スを伴ってサ変動詞になる例で、そう考えられるのは、次の 8 語 8 回である。

豁達 1 胡乱 1 莊嚴 1 従容 1 大小 1 団圓 1  
未審 1 歴然 1

現代語ならば、「ダ」「デアル」がついて形容動詞化する  
のが普通の言葉であるが、古典語では、「ナリ」「タリ」で  
はなく、「ス」がついてサ変動詞化することが、他にも見  
られる。例えば「安楽ナリ」とならず「安楽ス」となるよ  
うなものである。

⑩ 副詞 3語7例

恚麼 4 仮令 1 嫡嫡 2

これらは、形容詞の場合と同じく、そのようであること  
を示すサ変動詞となる。

⑪ 名詞 44語110例（一語平均二・五〇回） 一部を掲  
げる。

功夫 34 面南 1 面北 2 威儀 2 因縁 2 有時 1

葛藤 4 賀表 2 記号 2

など。表7に全例を掲げる。

表7 名詞十ス

功夫 34 面南 1 面北 2 威儀 2 因縁 2 有時 1 葛藤 4  
賀表 2 記号 2 九載 1 九拝 1 気色 1 潔斎 1 高坐 1  
光明 1 渾身 1 坐禅 13 作家 2 作法 1 三度 1 三番 2

正法眼蔵のサ変動詞——分析その二——（田島）

三返 1 実婦 1 宗称 3 祝聖 1 消息 2 辛苦 1 数番 1  
是非 1 全機 3 相好 1 祖儀 1 即縛 1 勅令 1 東西 3  
党類 1 南面 1 人事 4 涅槃 1 巴鼻 1 霹靂 2 表背 1  
仏心 1 名称 1  
計44語 110回

動詞性のあるなしにかかわらず、名詞にスを付けてサ変  
動詞化するのである。現代語において、普通にサ変動詞化  
する名詞（サ変接続名詞）と称されることがある）は一  
般には、動作性を含む名詞であるが、必ずしも、そうばか  
りでなく、完全な名詞にスが付いて、サ変動詞化するもの  
がある。その場合、スは代動詞として機能している。例え  
ば、「お茶スル」など、「お茶を飲む」という代わりであ  
る。正法眼蔵の場合は、それが一段と進んで、「あるもの  
あるものとしてある」ことを示す場合がある。例えば、こ  
のなかでは、「光明」「佛心」などがそれに当たる。七十五卷  
本にはないが、九十五卷本には、「宝塔」「虚空」などが、  
次に掲げるように、サ変動詞化している。

宝塔は虚空に宝塔し虚空は宝塔を虚空す（法華轉法華  
衛藤即応校注岩波文庫本正法眼蔵上二五九頁）

また、二字熟字としての普通の名詞と、単に名詞が重ねられただけの語(面十南・面十北)もここに含めておいた。

以上、正法眼蔵における二字漢語サ変動詞の語幹の語構成とその性質について分類した。①と②は多少異質である。少数ではあるが、正法眼蔵のサ変動詞に限らず、正法眼蔵の言葉遣いにとつてかなり特徴的なものである。③以下のように、その構成要素に分解してしまつては、必ずしも真相を理解できないと思うので、多少異質な分類であるが、このようにしたことを了解していただきたい。

また、その他の分類についても、疑問のあるものもあるが、分析に影響するほどのはないと考えている。以上を下表にもう一度整理してみよう。

語数・度数・NK(一語平均使用回数)値とも、③が一位である。当然と言えば当然である。その中でも、二字とも動詞性の文字の連なつた語が最多である。ただ、NK値は後部要素が接辞化した③—3が最大である。これは、「道取220例」「問取56例」「会取24例」「聞取12例」或いは、「疑着37例」「問着28例」「道着26例」「聞着15例」「動着12

種類	語数	語数率	語数順位	度数	度数順位	度数率	NK値	NK値潤
①引用	12	0.91	6	14	8	0.28	1.16	10
②漢文	8	0.61	7	10	9	0.2	1.25	9
③—1動+動	694	52.97		2882		57.76	4.15	
③—2接+動	4	0.3		4		0.08	1	
③—3動+接	43	3.28		516		10.34	12	
③全体	741	56.56	1	3402	1	68.19	4.59	1
④動+名	254	19.38	2	618	3	12.38	2.43	5
⑤名+動	50	3.81	4	93	5	1.86	1.86	8
⑥動副(副動)	177	13.51	3	690	2	13.83	3.89	2
⑦否+動(名)	8	0.61	8	18	7	0.36	2.25	7
⑧介+動	5	0.38	10	19	6	0.38	3.8	3
⑨形容詞	8	0.61	9	8	10	0.16	1	11
⑩名詞	44	3.35	5	110	4	2.2	2.5	4
⑪副詞	3	0.22	11	7	11	0.14	2.33	6
計	1310	100		4989		100	3.8	



例」など、「取」「着」「得」「了」「却」などといった動詞から接辞化したものがよく使われるからである。

因みに「取」を持つ語は16語354回の使用である。「着」は10語125回、「却」は7語18回、「得」は4語8回、「了」3語7回、「看」1語1回である。「崩御2」の「御」は以上とは性質が異なるが、天子の動作に敬意を添える接辞である。「拳頭1」の「頭」は単に「拳」を強める役割を果たしており、動詞として多用される接辞とは趣を異にする。接辞として「頭」は寧ろ、名詞を作る場合が多い。

語数二位は④動詞十名詞の構成の語である(一九・三八%)。度数では三位になる(一二・三八%)。動詞とその目的語で出来た普通のサ変語幹である。

語数三位は⑥副詞的要素が動詞を修飾する形の語である(一三・五一%)。度数としては二位である(一三・八一%)。NK値も二位である。この中には、2語、動詞的要素が前項にあり、後項に副詞的要素の来ている語がある(回互・親曾)がここに含めてある。

語数四位は、⑤名詞的要素が前項に、動詞的要素が後項に来る語である(三・八一%)。④に比べれば、臨時的に

造語されたものが多く、前項名詞が副詞的な働きをしているのが見られる。度数順では五位である(一・八六%)。

語数五位は、⑩名詞である(三・三五%)。度数では四位(二・二〇%)である。この大部分は普通の名詞であるが、名詞的要素が重ねられて臨時に造語されたものや数詞が付いて造語された語もある。

以下は、語数、度数とも余り多数ではないが、一渡り見とおそう。

語数六位は、12語の①引用漢文によるものである。位数は八位、NK値は一〇位である。つまり、12語中2語(以表・泥水)を除いて1回しか使われていないのである。

語数七位は、8語の②漢文語序によって作られた語である。度数順では九位、NK値も九位である。これも①同様に、2語(唯達・欲識)を除いて1回の使用である。

語数八位は、動詞に否定辞が着いたもので、7語17回、もう1語「無言」1語1回も含めた。「不会」は7回、「不肯」「不知」は各3回の使用である。正法眼蔵でやや特徴的な語である。「肯んぜず」と言えばいいところを「不肯す」というのや、「惜しまず」を「不惜す」という場合も

あるが、「不知ス」「不言ス」「不会ス」などは、知・不知、言・不言、会・不会を越えたところのことを言おうとしており、「知らず」「言わず」「会せず」と言い換えることが出来ない。

語数九位は、⑨形容詞、8語8回である。特別珍しい語があるのではない。サ変動詞化していることが、現代語的感覚から見れば多少違和感があるものである。古典語にも多くはないが、全く見られないものではない。

語数一〇位は、⑧介詞+動詞、5語19回の使用で、NK値は三・八〇と高く、三位である。この介詞は「為」字だけである。「…に対して、…スル」意であるが、「…」の部分は特に示されていない。

語数が最も少ないのは、⑪副詞の三語七回である。語数、度数とも少量であるが、強いて品詞的に分類したからであり、用法的には、⑨形容詞をサ変化するやり方、⑩名詞をサ変動詞化するのと大差はない。口語の「ああする」「こうする」などという、「ああ」「こう」に相当する。

二字漢語サ変動詞の語構成的側面についての、所要のことはほぼ上記に尽きる。

## 二・三 漢字三字サ変動詞の語幹の性質

語幹が漢字三字のものは、89語114回(一語平均一・二八回)の使用である。前項の二字漢字サ変は漢語サ変の中心であったのに対してかなり性格を異にしている。既にこの語幹の成り立ちについては、その語構成面から、拙稿「正法眼蔵のサ変動詞——その用例(一三)(漢字三字)——」(『東海学園国語国文二四号』一九八三)に記述しておいた。基本的にその分類に従って、ここに再度、語構成を中心に述べる。

上掲前稿では、ABCDEに大別して、更にその中を分けて全部で、五種一七類にしてあった。若干の変更を加えて述べる。六大別し、一七類に分けた。分類と所属語は次の通りである。

A類 動詞と接辞(動詞由来の) 或いは否定辞のみから成る。

A1 接辞+動詞 1語1回 相聖礙

A2 動詞+接辞+動詞 2語2回 見得徹・坐得断

A3 動詞+接辞 6語6回 参学取・思量取・脱落

去・脱落着・保任取・模索着

A 4 動詞＋否定時＋動詞 3 語 4 回 在不在・是不  
是・動不動<sup>2</sup>

A 5 否定辭＋動詞 3 語 4 回 不会取<sup>2</sup>・不思量・  
不道取

B 副詞または副詞相当句が動詞を修飾する。

B 1 イ副詞＋動詞 8 語 8 回 恁麼道・恁麼来・海  
上行・赤脚走・大小吹・同条出・同条入・容易  
会

B 1 ロ動詞＋名詞＋動詞 12 語 22 回 為他道・跣<sup>\*</sup>  
坐<sup>3</sup>・競頭參<sup>2</sup>・向僧道・向他道・向南行<sup>2</sup>・  
著眼看<sup>3</sup>・尽力来・随自去・随他去<sup>2</sup>・随他  
举・立地聽<sup>4</sup>（\*為は介詞）

B 2 イ副詞＋動詞 3 語 3 回 試參看・正見聞・同  
依止

B 2 ロ副詞＋動詞＋接辭 2 語 2 回 自道取・同道  
取

B 2 ハ副詞＋動詞＋名詞 5 語 5 回 急著眼・現在  
前・忽開化・自結果・同発心

B 3 動詞＋副詞 2 語 2 回 飛霹靂・礼三拜

正法眼蔵のサ変動詞——分析その二——（田島）

C 名詞が動詞の目的語になり、自動詞または他動詞と  
なる。接辭の加わる語もある。

C 1 イ動詞＋名詞（自動詞） 24 語 32 回 逞風流・  
行粥飯・樂小法・教菩薩・行法事・教諸仏・滅  
一日・現十方・作仏祖<sup>3</sup>・嚼楊枝<sup>2</sup>・收坐具・  
增一日・墮野狐<sup>2</sup>・搭袈裟・展坐具・転法輪  
5・道趙州・得授記・入涅槃・拈身心・放身  
心・迷山路・免人事・模枕头

C 1 ロ動詞＋名詞＋接辭 2 語 2 回 透担来・落地  
却

C 2 動詞＋名詞（他動詞） 2 語 2 回 結良縁・成  
菩提

D 名詞 7 語 11 回 一転語<sup>2</sup>・夏安居・三彈指<sup>2</sup>・  
十二拜・千万箇・般涅槃<sup>2</sup>・飢筋斗<sup>2</sup>

E 名詞＋動詞 4 語 5 回 見出現・祖證契・道現成  
2・仏附屬

F 引用 3 語 3 回 無処覓・欲見仏・令增長  
（語の後の数字は使用度数、数字の無い語は1回の  
使用）

以上のように語構成的に分類できる。前稿ではE・Fを分けてなかったが、今回は分けた。Eはその名詞が、下の動詞の主格になっている。Fは語構成的には、上記のいずれかに属させることも可能であるが、引用漢文に依っていることを重視して、この項目を立てた。

平均使用回数的小さいことから分かるように、語として安定したものではなく、D名詞以外は、三字熟語としては臨時造語的色彩が強いものである。

B 1に挙げた例は、初めの「動+名」が下の動詞を副詞的に修飾する語である。例示した語の内、「為他道」の「為」は動詞でなく介詞であり、「向僧道」「向他動」の「向」も動詞に由来するが、介詞的色彩合いが強い。この「向」は「為」と同様の役割を果たしている。

C 1とC 2は語構成的には同じであるが、C 1は自動詞として完結するに對して、C 2は他に目的語を要求する点で違いがあり、区別した。C 1の「透担来」の「担」は動詞でなく、「重担」の意で、「担を透り抜けてくる」の意である。

## 二・四 漢字四字サ変動詞の語幹の性質

四字漢字サ変動詞と認定した語は336語490回(一語平均一・四六回)の使用である。種々の語構成法が見られるが、二字で漢字サ変動詞となるものが二つ重ねられて四字漢字サ変動詞となっている場合が一番多く222語321回に及ぶ。但し、二字で漢字サ変動詞となるものの語構成は、二字漢字サ変の語構成を見たときに種々あったが、この場合も同様で、その中は、動詞+動詞の語構成、動詞+名詞の語構成のものが多数を占める。また、四字の漢字の内、前項の二字と、後項の二字の關係は、修飾+被修飾の關係、主語述語關係、二つの動作行為が連続、並列しているものなどである。ただし、この關係は必ずしも、客觀的に断定は出来ない。

これ以外にも、四字の語構成は種々有る。引用漢文によつて四字サ変が生まれているものは、その一句が主述を備えた文であったり、文の一部であったりする。慣用句をそのまま四字サ変化しているもの(即心是仏・或從經卷・或從知識)、あるいは、漢文措辭によつて文字を連ねて四字サ変化するもの(正面而坐・与仏同生・与仏同滅)など

四字漢字サ変動詞

種類	語数	度数	語例	備考
1動+1動+2動	1	1	対礼三拝	
1動+2名+1動	1	1	過這辺去	
1動+3名	15	27	問西来意	
1副+1動+1名+1動	1	2	急著眼看	
1名+1動+2動 修+被修	1	1	花開結果	
2動+2動	222	321	造仏造塔	漢9-14 修28-35 主1-1 連続184-271
2動+2名	9	10	遍歴諸方	
2動+助辞	1	1	檢点将来	
2副+2動	23	45	立地聴法	
2名+2動	16	23	触礼三拝	7-10主5-5 修4-8
2名+動+名	1	1	言外求巧	
3名+1動	5	6	百千万発	
4名詞	11	16	半跏趺坐	二語1-1 一語10-15
引用	14	15	唯聞法音	
介+1名+2動	6	6	為身求法	二名1 一名5 一名1
慣用句・漢分措辞	6	10	或從知識	
不+1動+2動 直列	1	1	不悟至道	
無+名+2動 修+被修	2	3	無自独悟	
計	336	490		

正法眼蔵のサ変動詞——分析その二——(田島)

も、全て一字一字分解して、同列に考える事も出来なくはないが、やはり、若干性質を異にしているように思うので、上記の引用(一四語一五回)・慣用句(三語七回)・漢文措辞(三語三回)によるものは、別扱いしておく。  
それにしても、実に多種多様である。ただ、これを大別すれば、名詞だけの語、動詞だけの語、名詞と動詞から成る語、副詞が加わるもの、介詞・否定時が加わるものというようにすることが出来る。

① 名詞だけから成る 11語16回 四字名詞10語15回  
二字名詞+二字名詞1語1回

(イ) 四字名詞 一夏安居 億千方法 九夏安居 九旬安居 2 九旬坐夏 結跏趺坐 4 見(現)成公案 2 丈六全身 稻麻竹葦 半跏趺坐(数字は使用回数、数字が書いてないのは、1回の使用、以下同じ)

(ロ) 二字名詞+二字名詞 信行法行

である。慣用句としたものと大差はないかも知れないが、これらは、名詞である点、若干異なると思うので、別にした。

② 動詞だけから成る 224語323回



突出相見	貪名愛利	同参成道	同参同證
同参来現	同坐同食	道取現成	同生同参
道他道己	同歩同連 <sup>2</sup>	動容進止	同力縮構
読誦通利	吞自吞他	日往月来	入至咨決
念仏読経	破壞墜墮	破顔微笑 <sup>2</sup>	拈花瞬目 <sup>2</sup>
諷誦通利	付嘱面授	粉碎其身	服喪藏身
奉觀供養	奉觀承事	仏来仏現	奉觀恭敬
弁肯究尽	辨道行持	放下幽棲	遍参功夫
奉馬奉水	北面礼拝 <sup>2</sup>	放光現瑞	放生得道 <sup>5</sup>
発足行脚	発足学道	保任護持	翻身回腦 <sup>2</sup>
面南叉手	面壁燕坐	問法得益 <sup>2</sup>	問来問去
揚眉瞬目	遥望礼拝	礼拝供養 <sup>5</sup>	礼拝求法
礼拝頂戴 <sup>2</sup>	礼拝面授	礼拝問訊	画展三拝 <sup>3</sup>
留心参学	裂破開明		留心勤学
計222語321回			

イのそれぞれ二字の動詞性の語は、右記例にも見るように、動詞+名詞のもの、動詞+動詞のもの、名詞+動詞、副詞+動詞のものなどがあるが、その一々は区別してない。

- (ロ) 一字動詞+一字動詞+二字動詞 1語1回 対礼  
三拝(「対」向かって、礼し、三拝する)の意。)

正法眼蔵のサ変動詞——分析その二——(田島)

口の例は1語だけであるが、「対礼」を一熟語と取りにくいので分けたが、この「対」は介詞に含めることも可能である。あるいは、イに含めても大した違和感はないかも知れない。

- (ハ) 二字動詞+助辞 1語1回 検点将来

形としては「検点シ」「将来ス」であるが、「将来ス」に大した意味はなく、和語の「モチキタル」に近い。それよりも、意味はさらに希薄で、「将来」は助辞的に用いられているのでイには含めなかった。

四字漢字は、分解をすすめれば、二字熟字の中に名詞がある場合もあるが、一応、第一次の分解では、動詞だけから成るものを掲げた。四字サ変の語幹中一番多い(語数率、度数率とも六六%)。

- ③ 名詞と動詞が句中にある(名詞が先にある) 23語  
31回

- (イ) 名詞+動詞+二字動詞 1語1回 花開結果

「花」は「開」の主語になっている。「花開」という一語と認めて良ければ、②イの例になる。

- (ロ) 二字名詞+二字動詞 16語23回

句中取則 渾身跳出 衆善奉行 椽栗充食 箭鋒相  
拄 相論往来 触礼三拜4 身心脱落 祖祖相伝

大悟現成 天厨送供 頭上安頭3 頭頂敬礼 夢中  
説夢3 夢裏證夢 問答往来(数字は使用回数、数  
字が書いてないのは、1回の使用)

前項が副詞的に後項を修飾したり、前項が後項の主語に  
なったりしている。

(ハ) 二字名詞+動詞+名詞 1語1回 言外求巧

「言外」が「求める」を副詞的に修飾し、「巧」は  
「求」の目的語になっている。「求巧」を一熟語と認  
めて良ければ口に入れることが出来る。

(ニ) 三字名詞+動詞 5語6回 一十七授 言語道断

2 修行功満 二十八授 百千万発

句頭三字の名詞が、最後の一字動詞の主語になったり、  
修飾語になったりしている。数字の場合は、副詞的に修飾  
することが普通である。これを副詞と見ることも可能であ  
る。名詞の副詞的用法である。

④ 動詞と名詞が句中にある(動詞が先にある) 25語

38回

(イ) 動詞+二字名詞+動詞1語1回 過這辺去

「這辺を過ぎて去く」の意である。この四字はひと  
まとまりであるが、こういう構成の語は他に見られ  
ない。

(ロ) 動詞+三字名詞 15語27回

蓋十方界 開住位門 開方便門3 現成正覚 作一  
円柏 成等正覚 成八九成 脱野狐身4 墮野狐身  
二 転大法輪 転妙法輪2 答西来意 白夏安居  
発菩提心6 問西来意

二字目以下の三字の名詞が、最初の一字の動詞の目的語  
になっている。

(ハ) 二字動詞+二字名詞 9語10回

一 札三宝 坐殺者漢 参飽大悟 巡堂一匝2 赤面  
無言 旋転飯食 打槌一下 弹指三下 遍歴諸方

である。動詞+目的語の關係のもの、動詞を修飾するもの  
などがある。「赤面無言」の「無言」は名詞であるが、「赤  
面し、無言する」である。

⑤ 副詞を句中に含む 24語47回

(イ) 副詞+動詞+名詞+動詞 1語2回 急著眼看2



最初の三字が最後の動詞を修飾する形になる。

(ロ) 副詞＋二字動詞 23語45回

一頓打殺 恁麼功夫2 呵呵大笑2 胡說乱道2

胡乱說道 再三撈攏 三復參究 祇管打坐 直須動

学3 次第巡堂 灼然迴避 審細功夫 深心信解

嫡嫡正伝4 嫡嫡正稟 嫡嫡相承11 嫡嫡相伝 嫡

嫡面授 同時參究 同時同道2 特為煎点 而今現

成 立地聽法4

である。前項の二字が副詞的に後項二字を修飾している。前項の二字は元々の副詞と、名詞が副詞的に用いられていたり(同時)、動詞＋名詞で出来た句が後項を修飾するもの(立地)などがある。

⑥ その他 介詞・否定辞を含む 9語10回

(イ) 介詞＋名詞＋動詞 6語6回

為衆說法 為身求法 為学人道 為法捨身 教他道

取 以頭換尾

である。「教」や「以」を介詞と言つていいかどうか分からないが、「教」「以」とも、普通に動詞とはしにくい。

「為」については、既に述べた。漢文措辞によるものの中

正法眼蔵のサ変動詞——分析その二——(田島)

に含めても良い例である。

(ロ) 否定辞を含む 3語4回

不悟至道・無師独悟2・無自独悟

である。それぞれ上の二字が後の二字を修飾する形になっている。

以上、他の分類方法もあると思うが、一応、6種16類に分けて述べた(他に、「引用」「慣用句・漢文措辞」がある)。種々の語構成であることが知られる。

## 二・五 漢字五字以上サ変動詞の語幹の性質

語幹が五字以上の場合、それはひとまとまりではあるが、もう一語とは言いかねるところがある。それゆえ、特に、慣用的な語句以外、ほとんどが一回の使用である。二回以上使われるのは、三語しかない。文の性質を持つもの、引用文から切り取られたもの、語を幾つか重ねたものなどがある。字数別に見てみよう。

① 五字漢字サ変の語幹 20種20回

(イ) 引用による 6語6回

以表諸仏体 開樹枝答他 及転次受決 見明星悟道  
身心徧歡喜 与百丈一掌

である。それぞれが、引用漢文に依っている。

(ロ) 漢文措辞による 3語3回

古仏為汝説 説法於説法 喫仏祖粥飯

である。特に、引用文が指摘できないだけで、前項の例と大差はない。

(ハ) 動詞+名詞の構成 5語5回

脱落一件事 吐却七八箇 吞却兩三箇 超出成正覚

下語説道理

である。前3語は二字動詞の目的語として三字名詞がついている。「超出成正覚」は「超出シテ正覚を成ず」、「下語説道理」は「語を下して道理を説く」と構成が若干異なっているが、動詞+名詞という構成であるという点で一纏めにした。

(ニ) 動詞+名詞+動詞の構成 2語2回

展坐具礼拝 転面向壁臥

である。それぞれ構成は違う。「展+坐具+礼拝」「転+面+向+壁+臥」のように分解できる。ただし、「転面

「向壁」を一熟語と出来なくはない。

(ホ) 副詞を含む 4語4回

巡堂前一匝 都撥転渾身 大展礼三拜 一称南無仏

「巡堂前一匝」の「一匝」を副詞的要素と見てここに入れた。他の三語は、「都」「大」「一」がそれぞれ副詞的に「撥転」「展」「称」を修飾している。

僅かな例ではあるが、このように、構成的には種々である。

② 六字漢字サ変の語幹 15種15回

(イ) 引用による 4種4回

開西来意答他 得吾皮肉骨髓 火焰同転法輪 火焰

立地聴法

である。それぞれ構成的には異なる。

「開西来意答他」は動+三字名+動、「得吾皮肉骨髓」は、動+五字名、「火焰同転法輪」は、二字名+副+動+二字名、「火焰立地聴法」二字名+二字副+二字動という構成である。

(ロ) 漢文措辞による 2種2回

索拳頭奉拳頭 索扠子奉扠子

である。それぞれ、三字二句の構成になっている。

(ハ) 動詞だけから成る 3種3回

出世度人説法 脱著行著證著 見聞読誦解義

である。二字三句が重ねられている。二字の動詞は、それぞれ「動詞+名詞」「動詞+接辞」「動詞+動詞」で、そろっている。

(ニ) 名詞+動詞の構成 3種3回

一面出両面出 盆水来手巾来 傍観脱野狐身 搭袈

袈帶坐具

である。前二句は三字二句から成り、「名詞+動詞」の繰り返しである。「傍観脱野狐身」は「二字名詞+動詞+三字名詞」で「傍観(他人)」は「脱」の主語になっている。

(ホ) 動詞+名詞の構成 1種1回

搭袈袈帶坐具

である。口と同様の語構成である。

(ヘ) 副詞を含む 2種2回

直須功夫勤学 曲躬如法問訊

「直須」「如法」は副詞として機能している。僅かな例ではあるが、五字サ変の場合同様、多種多様で

正法眼蔵のサ変動詞——分析その二——(田島)

ある。

③ 七字漢字サ変の語幹 7種8回

(イ) 引用または漢文語序による 5種6回

為三世諸仏脱法 一条拄杖兩人舁 一切衆生無仏

性 願生此娑婆閻土 劈面来大家相見

である。一文そのものもあり、こういうものがサ変動詞化しているのが、正法眼蔵のサ変動詞の大きな特徴である。

(ロ) 動詞だけから成る 1種1回

道来道去道来去

である。「来」「去」は接辞的に用いられている。

(ハ) 名詞を含む 1種1回

一展坐具礼三拜

である。

七字サ変は以上七種に過ぎない。

④ 八字漢字サ変の語幹 22種25回

(イ) 引用または漢文措辞による 10種13回

仏来仏現祖来祖現 九上洞山三到投子 見尽十方界

沙門身 心念身儀発露白仏 石碓米白夜事伝衣 大

地有情同時成道 3 毛吐巨海芥吐巨海 腰雪断臂礼

拌得髓 或從知識或從經卷 2 三世諸仏立地聽法  
である。複数回使われているのは、かなり慣用的な語句である。

(ロ) 動詞から成る 10種10回

合掌問訊焼香礼拝 供養恭敬尊重讚歎 供養恭敬礼  
拝奉觀 言談祇対運用施為 受持読誦解脱書写 随  
喜歡喜信受奉行 発身修行菩提涅槃 問自問他功夫  
參学 礼仏誦經焼香坐禪 離郷尋師辨道功夫

である。二字漢字サ変動詞になるのを連結したものである。

(ハ) 名詞を含む 2種2回

発心修行證大菩提 剃頭鬚髮出家受戒  
である。「大菩提」「頭鬚髮」という三字名詞を含んでいる  
点は異なるが、口と似た感覚で受け取られる。

八字サ変の語幹は、二字熟語が構成要素になっているものが多いのが特徴である。

⑤ 九字漢字サ変の語幹 5種5回

漢文語序による2種2回以外、全部語構成的に異なっている。

(イ) 漢文語序による

往無辺劫海轉妙法輪 祇管与官客相見追尋

(ロ) 動詞列挙

参来参去参到参不到

(ハ) 名詞を含む

無量百千万億度作仏 礼拝供養釈迦牟尼仏  
各々1回の使用である。つまり、臨時的に造語されたものである。

⑥ 十字以上の漢字サ変の語幹 5種5回

(イ) 十字の場合

三年五年二十年三十年

である。時間数量名詞を重ねて十字になっただけである。

(ロ) 十二字の場合

見釈迦牟尼仏成釈迦牟尼仏 知家非室捨家出家入山  
修道

である。前者は「動詞十五字名詞」の二句を連ねた、後者は  
二字漢字サ変動詞語幹を六句連ねたものである。なお、  
後者は、テキストにより、その次に更に「信行法行」と四  
字続け、十六字サ変動詞になるものもある。本稿は、七十五

卷本の乾坤院本に依っている。本稿の依っている本文は、この十二字で切れて、「シ」が送られ、改めて「信行法行」にもスルがついている。

(ハ) 十九の場合

一生万生把尾収頭不離叢林尽夜祇管跏趺坐

である。もはや「語」とは到底言えないが、この十九字に「シテ」と続いている。その最後の「跏趺坐ス」だけがサ変動詞だと無理して言おうとしても、その前の何所で切ろうとしても切れないのである。それで、これを一纏めにして扱うのである。

(ニ) 三十二字の場合

迦葉仏時曾住此山釈迦仏時今住此山曾身今身日月面月  
面遮野狐精現野狐精

という一文を、前項の場合同様、ひとまとまりとして扱うものである。途中を訓読して意味を取ることは出来るが、この正法眼蔵の文はそう読むべきものではない。岩波文庫本には訓点が付いているのでそれに依って、試みに読んでみれば「迦葉仏ノ時、曾テ此ノ山ニ住ミ、釈迦仏ノ時、今此ノ山ニ住ム、曾身モ今身モ、日月面、野狐精ヲ

遮シ、野狐精ヲ現ズ」ということになるが、こう読めば、正法眼蔵の本文にある「スルナリ」は読めなくなってしまう。やはり、この三十二字はひとまとまりで、「スルナリ」に続いていると見るべきであると考える。

二・六 まとめ

以上、一字漢字サ変から、三十二字漢字サ変まで語構成という観点から観察し、分析の結果を述べた。種々の語構成法があることが知られた。また、分類としては、次元が少し異なると思うが、引用漢文またはそれに準じたものからのサ変動詞化、漢文語序による文字連結のサ変動詞化が見られた。数としてさほど多くはないが、正法眼蔵のサ変動詞の特徴、ひいては、正法眼蔵の言葉遣い全体の特徴につながるものであると思う。それ故、そういう種類のものについては、文法的語構成法とは別に考えた。勿論、これらを文法的に語構成を考えたものに含めることは可能であるが、そうすれば、その特徴を失ってしまうので、「引用」「漢文語序」として分類した。

構成する漢字の文字数毎に検討した。相当文字数によつ

表9 語構成別一覧表

種類	引用	漢文	動詞	名詞	動+名	名+動	副+動	否+動	介+動	形容詞	副詞	計
一語			211	8								219
一度			1510	11								1521
二語	12	8	741	44	254	50	177	8	5	8	3	1310
二度	14	10	3402	110	618	93	690	18	19	8	7	4989
三語	3		9	7	28	4	32	6				89
三度	3		9	11	36	5	42	8				114
四語	14	6	224	11	25	23	24	3	6			336
四度	15	10	323	16	38	31	47	4	6			490
五語	6	3			7		4					20
五度	6	3			7		4					20
六語	4	2	3		1	3	2					15
六度	4	2	3		1	3	2					15
七語	5		1		1							7
七度	6		1		1							8
八語	10		10		2							22
八度	13		10		2							25
九語		2	1		1	1						5
九度		2	1		1	1						5
十以上語	2			1	2							5
十以上度	2			1	2							5
語計	56	21	1200	71	321	81	239	17	11	8	3	2028
度計	63	27	5259	149	706	133	785	30	25	8	7	7192
語率	2.76	1.03	59.2	3.5	15.8	3.99	11.8	0.83	0.54	0.39	0.14	100.0
度率	0.87	0.37	73.1	2.07	9.81	1.84	10.9	0.41	0.34	0.11	0.09	100.0

て、出来上がるサ変動詞の性格も異なる。一字・二字の場合、違和感のあるものもある程度である。三字サ変は殆ど臨時的造語、または、慣用句の転用などである。四字の場合は、一言では言えないが、二字漢字サ変の重ねられたものが中心で種々である。これは、六字、八字の場合にもつながらる。但し、五字以上になると、漢字の部分が、一つの文であるようなことが見られ、一語とすることが躊躇されなくてもないが、ひとまとまりであることは疑いないので、本稿では、全てそれをサ変動詞として取

り扱った。

以上について、語構成別の一覧表(表9)を別掲する。

〔表9「種類」の「一語」とは漢字一字サ変の語数、「一度」とは、同じくその使用度数。以下これに準ずる。〕

今後、更に、その、意味分野別構造分析をして、正法眼蔵のサ変動詞が如何なる意味分野別構造を持つのか考えてみなければならないと考えている。